

本論文は、おおよそ 7～12 世紀の北海道を中心とした地域で用いられてきた擦文土器と、それに関連する土器群に対し、考古学的方法に基づく型式編年をおこなうことによって、擦文土器の成立から終焉までの過程と周辺地域の土器との関係史を明らかにした研究である。研究の視野をサハリンから東北地方まで広げることによって広域的な視点から北海道で展開した地域間交渉を捉えると同時に、近年増加しつつある出土資料を丹念に収集して定量的な分析を試みた、広い視野と分析の緻密さを両立させた労作となっている。

擦文土器の編年については多くの先行研究があり、全道的な編年に関しては大枠での共通理解が生まれていた。しかし近年、資料の増加に伴い、従来の編年案で時期差とされた指標が一括出土例の中で錯綜するなど、先行研究の枠組みでは実態を捉えきれない状況が生じていた。また、東北地方の土師器の研究方法が無自覚に援用されるなどの方法的な混乱も生じつつあった。著者はこれらの問題を解決すべく、擦文土器と、その直前の土器である北大式土器、さらに擦文土器とオホーツク土器との折衷土器であるトビニタイ土器に対して、器種（甕・坏・高坏）別に以下の方法を用いて型式編年をおこなった。①甕に対しては文様帯というこれまで注目されていなかった属性の変化に着目し、新たな分析の視点を提示しながらその変遷過程をトレースして周辺地域の土器型式との系統的な関係を明らかにした。②甕についてはさらに文様要素についてもその組み合わせを個体別・一括資料別・層位別等に集計して分析し、変遷過程の実態を明確化した上で編年のための細別基準を提示した。③坏・高坏については器形と装飾に対する属性分析をおこない、東北地方との交渉の過程を復元した。④以上の器種別編年を確立した上で全体を統合し、歴年代や周辺地域との編年とも対比しながら北海道・東北北部・サハリンを含めた広域編年を確立した。以上①～④の成果に基づき、結論で著者は土器型式にあらわれた地域間交渉を復元し、それが変動することの交流史的な背景を考察した。本論文が提起した分析のための新たな方法や視点は研究史的にみても画期的であり、また定量的な分析に基づく実証性と広域的な視点とを両立させた擦文土器の編年研究もこれまでには例がなく、その意味で本論文は博士学位授与にふさわしい優れた研究成果と評価できる。

本論文で明らかになった土器型式の動きと、近年、文献史学からも言及されている北方の政治経済的な交流史との比較についてはより一層の検討が期待されるが、このことは本論文の学術的価値を損なうものではない。よって本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと認定する。